建設コンサルタンツ協会ホーム　協会誌トップページ　288号目次



# 2 墓・墓石の歴史とその変容

朽木 量
KUTSUKI Ryo
千葉商科大学／政策情報学部／教授

**墓の形態は有史以来、現代に至るまで時代と共にその姿を変えてきた。その変化の過程においては、宗教的意味合い、地域性等様々なことが影響している。日本において死者を埋葬する墓はいつごろから存在し、どのように移り変わってきたのだろうか。その時代背景と共に墓の歴史を探る。**

## 墓の形態の変遷

お墓参りに行くと、一般的に見られる角柱や頭部が弧状を呈する櫛形の墓石に混じって、時代毎のさまざまな形態の墓石を見かける。こうした墓地の景観は、どのように成立したのであろうか。まずは、日本における墓の流れについてみておきたい。

後期旧石器時代から墓と推定される遺構は存在している。例えば大阪府藤井寺市の「はさみ山遺跡」。その後、縄文時代には土坑墓、弥生時代にはさらに甕棺墓、支石墓、石棺墓、木棺墓、墳丘墓などが現われて、多様化が進む。古墳時代は古墳が有名であるが、これは上層階級の墓で、庶民の墓ではない。

古代の文献に見られる墓についての規定は古く、いわゆる「薄葬令」とも呼ばれる、『日本書紀』の大化2(646)年3月22日条には、庶民の墓について大地を掘って棺を土で覆うのみと記されている。しかし、実際には一般庶民の多くは、死体を道傍などに遺棄する遺棄葬・風葬をしており、遺体の処理にはあまり関心が払われていなかった。

平安時代においても同様であったと考えられ、藤原忠平の次男・師輔の日記『九暦』によると、摂政・関白を勤めた藤原忠平ですら義理の祖父・良房や高祖父・内麿の墓について確かなことは知らないと述べており、墓前祭祀はあまり重視されていなかったと考えられる。

中世に入ると、塚墓、集石墓、土坑墓、区画墓、火葬遺構をそのまま墓としたものなどが見られる。写真1は静岡県磐田市一の谷中世墳墓群遺跡の一部を移築復元した一の谷公園の様子である。塚墓、土坑墓、集石墓などの様子が分かる。

近世では将軍家の石槨石室墓に始まり、大名クラスの石室墓、上級旗本クラスの木炭・漆喰床・木槨木棺墓、木炭・漆喰床・木槨甕棺墓、旗本クラスの方形木槨甕棺墓、円形木槨甕棺墓、武士の甕棺墓、下級武士や町人の方形木棺墓、円形木棺墓（早桶）など、階層により埋葬施設に明確な差があることが知られている（図1）。

写真1　一の谷中世墳墓（左から火葬遺構2基、土坑墓2基、中央奥が集石墓、右が塚墓2基）

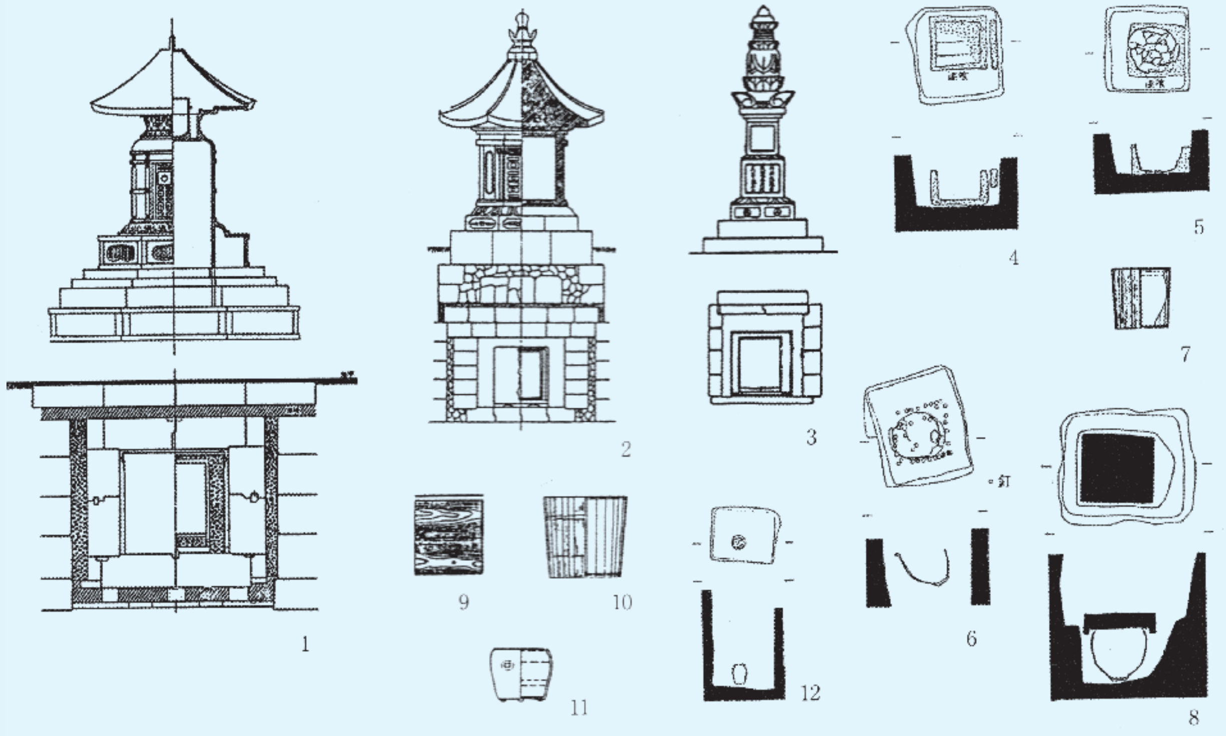
## 墓石の歴史

墓の歴史がそのまま墓石の歴史となるわけではない。まず、前提として墓石は墓塔と墓碑に分けられる。墓塔とは石製の仏塔を墓上標識として建てたものであり、墓碑とは仏教的な要素がなくなり単なる墓上標識としてのみの機能をもつ碑碣である。結論を先取りして述べると、当初は墓塔として建てられることが一般化し、後に仏教的要素が欠落して墓碑となっていくという理解が一般的である。

さて、墓の前に碑を立てるという行為は古代から行われていた。例えば「上野三碑」の一つである山ノ上碑は天武天皇10(681)年の建立とされる。律令の編目の一つ『喪葬令』立碑条にも「凡そ墓には皆碑を立てよ、具官姓名之墓と記せ」とあり、高官の墓には墓碑を立てることを定めている。しかし、これらの墓碑は現在の墓石と直接には結びつかない。

現在の墓石に繋がるような仏教的な石塔を墓前に立てるようになるのは、平安時代からである。『日本文徳天皇実録』の嘉祥3(850)年4月18日条には仁明天皇の深草陵に立てられた卒塔婆の陀羅尼が落ちたという記事があり、陵墓のどこかに卒塔婆が立っていたことが分かる。この後、嘉承2(1107)年に崩御した堀河天皇陵には石塔が建立され、大治4(1129)年崩御の白河上皇は成菩提院三重塔下に石櫃を安置し、久寿2(1155)年崩御の近衛天皇は安楽寿院多宝塔内に、保元元(1156)年崩御の鳥羽上皇は安楽寿院三重塔内に埋葬され、歴代の天皇・上皇がいずれも仏塔と結びついて埋葬されている。仏塔は仏舎利（釈迦の遺骨）を埋納するものであったのが、人の墓と結びつくようになったのである。

この傾向は貴族や上級武士に浸透するようになり、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて、死者の菩提を弔う供養塔として五輪塔や宝篋印塔などを用いるようになった。同時期に成立したとされる『餓鬼草紙』にも墓上に五輪塔が描かれている。また、現存する在銘




**江戸の埋葬施設分類**
1・2：石槨石室墓　3：石室墓　4：木炭・漆喰（石灰）床・槨木槨木棺墓
5：木炭・漆喰（石灰）床・槨木槨甕棺墓　6：方形木槨甕棺墓　7：円形木槨甕棺墓
8：甕棺墓　9：方形木棺墓　10：円形木棺（早桶）墓　11：火消壺転用棺　12：火葬蔵骨器

図1　江戸の埋葬施設の分類（谷川2019）

**写真2**　在銘最古（1259年）の宝篋印塔（生駒市輿山往生院）

最古の五輪塔は岩手県平泉町中尊寺釈尊院のもので、仁安4（1169）年の建立である。同じく在銘最古の宝篋印塔は奈良県生駒市輿山往生院のもので、正元元（1259）年の建立である。

14世紀前半になると、奈良市の西大寺に拠点を置く律宗系の人々が畿内を中心に墓地整備を行うようになり、中心に大型の五輪塔を立て、その塔の直下には関係者の遺骨を後から納骨できるような設備が設けられた。そのため、より多くの人が墓塔と結縁できるようになった。さらに、室町時代後半になると、近畿地方を中心に、一石五輪塔などの小型の石塔を立てることが庶民層にも普及していった。

江戸時代になると、小農自立など庶民の間で「家」が成立しはじめることで、寺檀関係の基盤が整備された。これにより、寺請制が浸透していくことで、寺院付属墓地も成立していった。こうしたことにより、墓石の造立が広範囲にみられるようになった。また、後で詳述するが、当初は中世以来の墓塔であったが、江戸時代中期になると仏教的色彩のあまりない墓碑が主流となる。

## 近世の墓石を詳しく見る

こうした近世の墓石については墓標研究という形で形態、石材流通、仏教思想の変遷など、文献史学や歴史考古学の成果と関連付けられながら進展してきている。例えば形態に注目すると、一般的に見られる角柱や頭部が弧状を呈する櫛形の墓石に混じってさまざまな形態の墓石を見かける。しかし全体としては、50～100年ほどの周期で主流となる形態が流行り廃りしながら変遷している。特に、江戸時代前期までの墓石は関東の板碑形（写真2）、関西の舟形五輪塔浮彫など地域差も大きく、各地で様々な形態が用いられていたが、江戸時代中期から普及し始める櫛形の墓石（写真3）は全国的な斉一性を持つことで知られている。これ以降の角柱類の墓石などは全国的な斉一性を持つ。

こうした斉一性をもつ理由は、石材流通のシステムが確立し、製材された石材が流通するようになったためと考えられる。墓石の石材も同様で時代ごとに少しずつ変化するものの、ある一時期に限ってみると似通った石材が使われている。特に、江戸時代中期以降は石材流通システムの整備により、広域な分布域を持つ流通石材による画一化が進む。

このように当時の社会や習慣に影響されながら墓石が作られたため、墓石から過去の社会のあり様やその変化を読み取ることができる。墓地の改葬が進んで、かつての状況が分からなくなってしまった墓地でも、家毎の区画の中にある墓石の形態とその組合せを見れば、どの家が旧家なのかがすぐ分かる。即ち、家毎の墓石の形態がバリエーションに富んでいれば、それだけ多くの時間を経てきたと推察される。

墓石の形が変わる理由は、寺請制の浸透による仏教の形骸化と関連付けられて論じられている。これは、江戸時代中期以降に普及した櫛形のように、仏塔と共通するデザインが無くなることが全国的に指摘できるためである。

また、正面だけに碑文を記載する「一観面」の墓石から、側面にも戒名を記載する「多観面」の墓標への変化も指摘されている。記載面が多くなることは、江戸時代前期における一被葬者に対して一基の墓標を立てるという「個人墓」というあり方から、江戸中期以降に主流となる夫婦・親子・兄弟など一基に複数の被葬者を祀る「夫婦墓・複数墓」を経て、先祖代々を合祀する家単位の「家族墓」という墓のあり方への変化と対応する。早いものでは江戸時代後期に「先祖代々之墓」と記載されるような家族墓が出現し始め、明治時代には一般的となる。

**写真3**　板碑形

**写真4**　櫛形



**表1**　墓石に刻まれる種子（梵字）

| 所在地 | 墓地名 | ア | キリーク | カ | キャカラバア | その他の梵字 | 家紋 | 合計 | 典拠 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 千葉県 | 船橋市<br>中野木 | 145 | 1 | 11 | 2 | 14 | 3 | 176 | 河野1978「中野木の墓石塔調査から」『中野木の民俗』所収 |
| 埼玉県 | 合角ダム周辺 | 127 | 0 | 15 | 0 | 2 | 23 | 167 | 下山1992「墓石」『秩父合角ダム水没地域総合調査報告書』下巻人文編　合角ダム水没地域総合調査会　所収 |
| 神奈川県 | 川崎市<br>常楽寺 | 231 | 4 | 11 | 13 | 1 | 128 | 388 | 川崎市博1987『常楽寺の石造物』川崎市博物館資料調査団 |
| 京都府 | 木津町<br>梅谷心楽寺 | 26 | 219 | 29 | 1 | 0 | 1 | 276 | 朽木1996「近世墓標とその地域的・社会的背景―山城国木津郷梅谷村の事例―」『史学』66-1 |

## 銘文から読み取れること

墓石の造立趣旨を明らかにすることのできる銘文としては、置字がある。置字とは戒名の後に置かれる「菩提也」や「霊位」「各位」等の文字である。「菩提也」の置字は、「為」という頭書とセットにして「為～菩提也」という形で用いられることが多く、戒名の人物の死後の冥福を祈った追善供養の意味合いが強いと考えられる。一方「霊位」は、位牌に起源があると考えられている。それは、墓を霊の依代として捉えていることの証拠であり、死者に対する記念碑的な意味合いが強いと考えられる。多くの墓地において17世紀には「菩提」類の置字が使われ、18世紀以降に「霊位」類が主に用いられたことが指摘されている。こうした供養塔的な墓塔から霊の依代的な墓碑への変化は、墓にまつわる信仰のあり方の変化として解釈できる。

もう一つの銘文として頭書がある。頭書とは、墓石の上部中央に生前帰依した宗派の本尊や、死去を明示する文字、仏教教理に関連する語のいずれかを記すことをいう。具体的には「帰元」「帰真」「物故」、「早世」「空」「妙法」「喝」「咄」などがある。また、頭書が記される位置に種子（梵字：古代インドで使用された文字の一種）や家紋が記されている場合もある。 頭書では、全国的に際立った特徴が認められない一方で、頭書のかわりに記された種子には東西間で顕著な差異が認められる。

表1にあるように、関東の3墓地ではいずれも「ア」が主体を占める。それに対し、関西の梅谷心楽寺では「キリーク」が主流である。管見の限り、「キリーク」が主体を占めるのは、木津町周辺だけではなく関西全体の傾向といえる。したがって、個別墓地での特徴というより、関東ないし関西という比較的大きな地域内で一般的に認められる差異であると考えられる。「キリーク」は阿弥陀如来の種子であり、「ア」は大日如来の種子である。こうしたことを踏まえると、墓石の種子に見られる東西の地域差は、信仰のあり方の違いを反映したものであると考えられる。

## 火葬と土葬

最後に、火葬と土葬という葬法の違いについて触れる。仏教の伝来によって火葬が導入され、『続日本紀』の文武天皇4（700）年3月の条によると、僧道昭の遺体が飛鳥の栗原で火葬されたのが始まりとされている。その2年後には持統天皇が火葬された。そして仏教文化の浸透や薄葬の思想も関係し、皇族・貴族を中心に次第に火葬の習俗が広まっていった。一方、前述の墓の歴史のところで書いたように、江戸時代までは土葬が主流であった。江戸時代後期に成立した『諸国風俗問状答』からは、江戸時代後期には土葬と火葬が並列的に展開していた様子が分かる。

しかし、明治17（1884）年の「墓地及び埋葬取締規則」、明治30（1897）年の「伝染病予防法」の施行などにより、明治時代以降になると火葬が次第に増加していく。火葬率は明治29（1896）年には26.8％であったが、昭和15（1940）年には55.7％、昭和45（1970）年には79.2％へと増加し、現在ではほぼ100％が火葬となっている。

自宅で末期を看取ることから「病院での死」に変化したことで、死が非日常化して死が遠ざけられるようになったこと、地縁的つながりが希薄化した現代社会において、墓の穴掘りが依頼しにくくなったことなどが火葬化を決定付けたのであろう。


**＜参考文献＞**

1）朽木量2004『墓標の民族学・考古学』慶應義塾大学出版会

2）谷川章雄2019「墓標・埋葬施設・副葬品」『季刊考古学』149:22-25